

『師と弟子』

国際日本文化研究センター所長 山折 哲雄

一 京都に住む

山折でございます。只今は過分なご紹介をいただきまして大変恐縮しております。私は今年71歳です。高崎先生は76歳、5歳の年長の師匠であります。高崎さんと個人的な師と弟子の関係ということになりますが、それをお話しすると、面白い話も出てきそうですが、今日は止めておきます。

今、私は京都に住んでおります。京都に参りまして14年が経ちました。出身は東北でございます、自分は京都の水に合うかなと、最初京都に参ります前は非常に不安でした。東京にも20年近く住んでおりましたし、どちらかというと自分は東北・関東型の人間だと思っております。ところが4、5年くらい前から、京都駅前に建てておられます京都タワーが何とも美しいタワーに見えてきたんですね。東京タワーよりもはるかに京都タワーのほうがきれいだと思うようになった、その辺りが私の意識が関東から京都に移り始めた転機だったと今は思っております。

東京タワーは単なるパリのエッフェル塔の猿まねじゃないか、そう思うようになったんですね。今日は鶴見で、ちよつと中央から外れておりますからこの位のことは言ってもよろしいでしょう。それに比べると、京都タワーというのは京都の都にしか現れない「たおやめぶり」のタワーであると思うようになりました。あれを、蠟燭だなどと皮肉を言う人もいるのです。確かに蠟燭みたいなのところもあるのですが、あの柳腰の色気が何とも言えない、というようなことを私は言ったり書いたりするようになって、ようやく京都人も山折を受け入れてやろうという気持ちになったようです。

今そんなことで、住んでおりますのは下京区の西洞院綾小路という所です。ご存知の方は思い出していただけるとよろしいのですが、地下鉄の烏丸を下りて歩いて5分位の所であります。いわゆる京都の洛中の、繁華街のど真ん中であります。祇園まで歩いて20分、環境が良いような悪いような、そういう所に今住んでおります。それで、日曜日のような時間のあいている時、よく散歩に出ます。そうすると、色々な歴史的な古戦場に出会うことになります。これが楽しくて楽しくて仕方ありません。因みに私の住んでおります所から―勿論部屋を借りて住んでいるだけでありますけれども―北へ10分くらい歩きますとかつての本能小学校というのがあります。かつての小学校であります。今は学区の空洞化のためにここには生徒がいなくなって、他の施設に使われております。その本能小学校というのは非常に広い敷地に建てられた大きな大きな小学校でございまして、ああここで織田信長が自刃したんだと感じ入るときがあります。その場所がわずか歩いて10分の所にあります。それから又、私の所から西にやはり5〜6分参りますと、「二十六聖人殉教の地」というところに出ます。16世紀、ポルトガルやイスパニアの宣教師が日本にやって来てキリスト教の布教活動をいたしました。しかしやがて、キリシタン弾圧の嵐にであつて、イエズス会士、フランシスコ会士そして日本人の信徒たち26名が長崎に引つ立てられ磔に処せられた、そういう殉難

のキリシタンたちを偲ぶ、記念する碑文がそこに掲げられております。これがわずか歩いて5分の所です。そこから更に西の方に10分くらい歩いて参りますと壬生屯所にぶつかります。これは幕末維新期における新撰組の本拠地だった所であります。その周辺には新撰組が勤皇派の志士たちと切り結んだ、殺し合いをした惨劇の場面があちらこちらに点在しております。京都という所は少し歩くと血しぶきがおい立つてくるような所だな、死の記憶が足下に迫ってくるような所だということを実感させられるんですね。京都という都は呪われた都ですよ。そこに自分の欲望や野心を遂げようとする人間がやって来て、その多くが悲劇的な死を遂げている。だから、そういう人々の記念すべきスポットを大事に大事に残し続けている、その点でもこわい所ですね。100年、500年、1000年の間そういう死の記憶、惨劇の記憶をずっと残し続けている。私、よく言うんですよ、京都の人々に向かって「京都っていうのは呪われた都だ」って。御霊神社がそうでしょう。至る所に非業の死を遂げた人の魂を祀る社、そしてお寺が建てられているわけですね。

ところがある時、わたしの住んでおります西洞院通り、これは南北を貫いている通りであります。それを南に下って散歩をしておりました。するとわずか5分で、高辻通という通りにおつかりまして、そこをちょっと西に入りました。私は気がつかなかったのですけれども、そこに大きな石碑が建っております。何と書いてあったか。「道元禪師御示寂之聖地」と書いてあったのです。道元さんはわが家からわずか5分の所でお亡くなりになったんだ、それがほんとうの史実かどうか、もうひとつわかりませんけれども、まず間違いないだろうと私は思っている。その石碑の場所から更に西洞院通りを5分程南の方に下りますと松原通という通りが現れて参ります。その通りをちょっと東に入った所にこんどは「親鸞聖人御入滅之地」という石碑が建っていました。おそらく親鸞さんもそこでお亡くなりになったんであろうと言われているんですが、ともかくこのような、親鸞聖人や道元禪師を記念する

石碑の前に立ちますと、歴史の記憶が一ぺんに13世紀まで飛びまして、鎌倉時代のあの開祖たちの生涯が眼前にパッと浮かび上がってくるような気持ちになります。これも京都に住んでいることの有り難さなんですね。やはり京都ってすごい所だと思います。

## 二 私の出会い

今日は「師と弟子」というタイトルを出させていただきました。私は、敗戦の時は旧制中学2年でした。出身地は岩手県の花巻という所、宮沢賢治が生まれた所があります。私の生まれた所は浄土真宗の末寺でございます、そこから150mくらい離れた所に宮沢賢治さんの生家がございます。敗戦が昭和20年8月で、その敗戦直後の地理の時間でのことでした。その授業中、私はどういうわけか毎時間のように最前列で小説を読んでいた。その地理の先生が特に嫌いだったわけではない、その授業が面白くなかったわけでもない、しかし、どういうわけかその先生の授業になると最前列に座って小説を読みふけていたのです。先生はしばらくのあいだは黙って見逃して下さいましたけれども、あるときついに痺れを切らしたのでしよう、我慢しきれなくなって私の所にやってきまして、襟首を掴まえて立たせられた。そして往復びんたで殴りつけられました。10回くらい往復びんたで殴られましたが、最後はそのまま引きずって廊下に突き出されて足蹴にされてすっ飛ばされた。私の眼鏡が廊下の先の方に飛んだことを覚えております。その時の体験というのがその後もずっと今日まで私の記憶に残り続けて、何かというところと浮かび上がってくるんです。何故自分はその時あんな事をしたんだろう、何故あの時あの教師があれ程激昂して自分を殴りつけてきたのだろう、これがよくわからなかった。

やがて高校を卒業して私は東北大学に入りました。大学を出て就職がなかったものですから、しかたなく大学院へ入った。生活を支えるために女子中学校の非常勤講師を始めたのです。今でも忘れることができませんけれども、最初に勤めた女子中学校の国語の時間でしたが、しばらく経ってからその教室の一番後ろで私の講義中下を向いてわき目もふらずに本を読んでいる学生がいるのに気がつきました。これが気になって気になって仕方がない。しかしすぐに注意することも出来なかった。新米の教師であります。しかし、1時間の講義をするのが苦痛なくらい、その生徒の本を読んでいる姿がある種の圧力になって教壇上の私に迫ってくる。落ちついて講義をするなんてとてできない。そこで、1カ月くらい経ちました時に、今日こそはあの生徒を叱りつけてやろう、こう覚悟を決めて学校へ行って講義を始めました。相変わらず一番後ろで何かを読んでいる。それで講義の途中に一呼吸入れて、教科書をピシッと教卓の上に叩きつけた。そのままずっと前に進んで行って、その生徒の前に近づいて下を見ました。そのときその生徒が読んでいた本がいったい何だったか、ドストエフスキーの小説でした。それがドストエフスキーの小説だとわかったとき、私の体の中からエネルギーがすーっと消えていくのを感じた。叱りつけようと思って側までツカツカと進んで行ったにもかかわらず、その勢いが萎えてしまった。何故か。ああ、俺の拙い講義よりはドストエフスキーの小説の方が面白いよな、とそのとき瞬間的に思ったのです。どうしてそんな余裕が私にあったかよくわからない、そんな余裕は無いはずです、その時はカッカしてるわけですから。恐らく私にも文学少年の時代があったからだと思います。文学こそは世界の最高のテキストである、そういう信念を当時の私が持っていたからかもしれない。だから席の最後列で、私の講義に反抗するように隠れて小説を読んでいたその女子学生に対して自信を持って叱ることは出来なかった。叱るところの騒ぎではない、こちらのエネルギーが消えてしまった。そのまま後を振り向いてすぐと教壇へ戻ってきました。そのあと、力なき講義を最後までやって、それで教場を去

ったのです。教室を去りながら私は思いました。かつて旧制中学2年の時、最前列で小説を読んでいて教師に殴られたこと、その時の教師の悲しみを初めて私は知ったのです。私の教師生活の第1頁であります。

やがて東北大学大学院を終えて社会に出ることになります。その時私の主任教授だった先生の所へお礼に参りました。ところがその先生が別れ際に言われたことが、すごいことだったんですね。未だに忘れることが出来ないでおりますが、それは、「教師というものは一遍は学生に裏切られるものだよ」こう言われました。卒業した栄えある日、私が尊敬している師匠、その人が教え子に向けて最後に差し出した饞の言葉が「教師というものは一度は学生に裏切られるものだよ」。これはショックでしたね。そしてその意味がよくわからなかった。どういう意味だろうと思ひながら私はその先生の部屋を去りました。以来半世紀の間、そのまま私は教師を続けております。今になってその時の先生が言った言葉の意味が何となくわかるようになった。なぜなら私も、教師をしていながら何度学生たちに裏切られたか知れなかったからであります。教師であれば誰でもいろんな形で学生や生徒に裏切られた経験を持っている筈です。ただ、もしもその先生にそういうことを言われなければ、自分が学生から裏切られたという体験を、それとして大事な問題として自覚することはなかったかもしれない。私の理解によりますと、こういうことになります。学生というのは教師をいくらでもごまかすことができるのです。一番後ろの方に体を隠して、頭を隠して勝手なことをすることができ。友達に代返を頼んで自分は欠席することもできる。表面では良いようなことを言っておいて影で何でも好きなことが出来るのが学生であり生徒であることの自由な世界であります。こういう関係というのはどうすることもできない。ところが教師の方は学生をごまかすことができない。ひとたび学生たち、生徒たちの前に立つ時、教師はその全てを見られている。前から、後ろから、その言動の一つ一つが見られている。そのことをあの先生は言われたのかなと思うようになりましたね。学生は自由に教師を裏切ることが出

来る、ごまかすことができる。ところが教師は絶対に学生、生徒を裏切ることとは出来ない、ごまかすことは出来ない。実際は裏切っているんですけれどもね、教師というものは。にもかかわらずある段階で、教師というのは生徒の前で裸にならなければならない。学生は教師の前で裸になる必要はない。そういう関係ですね。この両者の間には大変な落差がある。これが考えてみれば、私の少年時代、青春時代を通しての教師体験であり、学生体験であったような気がします。今日は「師と弟子」というテーマを出したのですから、自分の体験を語らざるを得ない、そう思っただけのことを申し上げているわけです。

### 三 棟方志功のこと

棟方志功という板画家がおりますけれどもご存知でしょうか、ご存知だろうと思います。青森県青森市の出身であります。生来、目が悪かった。しかし彼はある時、俺はゴッホになるんだと、ゴッホの絵を見て絵描きになる決意をして東京に出ていった。そしてあの素晴らしい棟方板画をつくるわけですね。私は岩手県の出身でありますから、棟方志功の芸術の世界というのは縄文芸術の典型ではないかと思っております。京都や関東の芸術家の在り方とは本質的にその性格を異にするものではないか、漠然とそう思っていた。あの棟方志功のお父さんは刃物鍛冶、刃物を鑄る仕事をしていた方です。そこに、彼の板画——ノミや刀で板を削って作品を創るといふ、あの独特の芸術の世界を創り出していった母胎があるわけです。子供の頃おやじさんに鑄物づくりを徹底的に叩き込まれたのです。ある時真つ赤に燃える鉄を運んでいたとき、不注意でそれを土間に落としてしまった。すると、おやじさんがすごく気性の激しい人で、「このド間抜け、その鉄を早く炉にいれろ」と、こう言ったんですね。彼は慌ててそれ

を素手で掴んで炉に入れた。すると手の肉がベロッと溶けた、そういう体験をした人です。この棟方志功が青森の片田舎でゴッホの絵を見て、おお、ここに俺がいた、俺はこのゴッホになるんだ、「わだば（俺は）ゴッホになる」、そう叫んで一人で東京に出て行っただけです。かれにははじめから師匠というのがいなかった。その師匠のいない所で、自分のイメージに忠実に従った最初の傑作をつくった。それがあの「二菩薩釈迦十大弟子」という板画だっただと思うんです。釈迦十大弟子——つまりお釈迦さんには十人の弟子がいたんですね。舍利弗、目連、阿難、羅侯羅等々十人のお弟子さんがいた。その十人の弟子たちを一人一人等身大の板に彫りつけてつくり上げたんです。ご覧になった方も多いと思いますが、その他に更に二菩薩を付け加えた。お釈迦さんの脇侍であります。文殊菩薩と普賢菩薩を付け加えてつくった。十大弟子の方は、これは男性の立像として描かれています。二菩薩の方は完全な女体に描かれています。棟方志功好みの豊かなエロティックな女性の姿に、二人の菩薩さんが描き分けられている。実にいいものですね。これをかれが創ったのが昭和14年であります。私は図版で見たり展覧会に出品されたものを見たりして、見るたびにずーっと胸を打たれてまいりました。これは今では棟方志功の最高傑作と言われているものです。ところが戦前、この作品を高く評価する人は必ずしも多くなかった。戦後になりました。昭和34年でありますけれども、ブラジルのサンパウロでビエンナーレという世界的な展覧会が行われて、そこでグランプリを取るんです。以来、棟方志功の名前が世界に轟くようになり、国際的なアーティストになるわけですね。それまでは国際的にはほとんど無名の芸術家だった人です。

「二菩薩釈迦十大弟子」を何度か見ているうちに、ある時私は、はっと気づいたので。実は「二菩薩釈迦十大弟子」には仏陀の姿が彫られてはいないのです。弟子たちだけだということに気づいた。棟方志功は何故、仏陀その人を板画の表現対象にしなかったのか、そういう疑問を持つようになりました。不思議でしょう。釈迦十大弟子



と言いながら仏陀を無視している。釈迦を無視している。それは一体何故か。そう思いつづけておりましたら、昭和28年になって今度は「耶蘇十二使徒」という板画を彼は創った。これは「二菩薩釈迦十大弟子」がビエンナーレでグランプリを取る6年前であります。仏教の世界に挑戦したから今度はキリスト教の世界に挑戦しよう、というわけだったのでしよう。それで「耶蘇十二使徒」像を創ることを考えついた。イエス・キリストにはご承知のよううに12人のお弟子さんたちがいました。その12人を描き分けようとしたのです。ところがこの「耶蘇十二使徒」というのは不可思議な版画なんです。まずその目の表情が異常なんです。そのどれも両眼がまともに描かれていない。片方の目がまん丸であれば、もう片方は真四角になっている。三角のも、潰れたものもある。それから片方の目が完全に潰れて、もう片方の目しか見えないのにその目の中に2つの瞳が点じられている。奇妙と言えば奇妙、奇抜と言えば奇抜。しかし全体の印象が非常にグロテスクな印象ですね。「二菩薩釈迦十大弟子」の方の一人一人の弟子たちの顔の表現というのは、非常にシンメトリックな美しい顔になっています。目がパッチリ開かれている、とにかく目の表現が印象的です。二菩薩釈迦十大弟子」の方の目の表現は、まるやかで均整がとれていて、美しい。「耶蘇十二使徒」の方の目の表現はグロテスクで歪んで、まるで身体障害者のような目をしている。一体これは何故かというのがひとつの問題です。棟方志功というのはさきにもふれましたが、目が悪かったんですね。実際に板画を彫っているときの写真が色々紹介されておりますが、面眼を板につけるようにしてノミを使っておりません。自分の目の悪いという身体的な状況が板画の表現に反映しているのかなと私は思っています。あるいは仏教に対する理解に対して、キリスト教に対する考え方というものが偏見に満たされていた結果そうなったのかもしれない、といったようなこともあれこれ色々と考えてはいたのですが、しかしこの問題についてはこれはこうだというふうに最終的な理由付けをすることがなかなかできない。ところが面白いのは、その「耶蘇十二使徒」の板画にお

きましても、イエス・キリストその人の像が出てこない、イエス・キリストを無視している。そこで私は思ったのです。棟方志功という人は仏教の世界では仏陀を無視し、同じように、キリスト教の世界を描く時にもイエス・キリストその人を無視しようとしているのではないかと。そういう独特の精神の持ち主ではないかという風に考えるようになったのであります。棟方志功の前に師なしということですが、この俺にとって、師などというものがいるものか、という気迫のようなものが棟方の芸術を支えていたのではないかとということです。つまり彼には絵の師匠などというものはいなかった。彫刻の師匠も、勿論板画の師匠もいなかった。芸術の世界は自分一人で築いていくものである、こういう信念ですね。それが「二菩薩釈迦十大弟子」を描きながら釈迦を無視し、「耶蘇十二使徒」を描きながら耶蘇その人を無視する、こういう態度になったのではないかと、こういうことです。ところがのちにあって、この棟方志功の作品を高く評価する人が出てくるようになります。その一人が柳宗悦という人です。民芸運動のリーダーだった人です。河井寛次郎、浜田庄司という陶芸の先駆者な仕事をした人々も棟方を高く評価するようになる。志賀直哉も評価した。武者小路実篤も評価している。しかし、棟方志功にとっては、白樺派の錚々たる文人たちはじつはものの数ではなかった。自分を評価してはくれたけれども、自分の師匠とはひとつも認めていなかった。ここが凄いとありますね。棟方志功は後日よく言っていたのですが、自分が一番尊敬している絵描きは梅原龍三郎と安井曾太郎だと。ところが梅原龍三郎も安井曾太郎も所詮はフランスの絵描きの弟子じゃないか、フランスの絵の模倣じゃないか、自分の師匠などではあり得ない、と言っていたというんですね。

こういう棟方志功の存在に触れた時私が思い出しましたのが、中国の臨濟という臨濟宗を開いたお坊さんの言葉であります。『臨濟録』という書物があります。中国の禪の伝統の中で、禪の究極は一体何かということを考え抜いた傑出した禅僧が臨濟であります。その臨濟録の中にこういう言葉が出てきます。「仏に逢うては仏を殺し、

祖に逢うては祖を殺す」。仏に出逢ったら仏を殺せ、師匠に逢ったら師匠を殺せ、そういう激しい言葉が『臨濟録』の中に出て参ります。それは実際に仏さんに会ったら仏さんを殺せといっているわけではないでしょう。師匠に会ったら文字通り殺せと言っているわけでもない。要は、その位の気力で眼前の困難を乗り越えていけ、仏や師匠を乗り越えて先に進んでいけ、という意味だろうと思います。しかし、そう言ってしまうと、臨濟のいつていることの本質がこぼれ落ちてしまうような気もする。実際に、その師匠を殺してしまうようなことがあったかもしれないか。ここは、宗教がオウム真理教になるかならないかの際どい所でもあります。オウム真理教の問題がこのような臨濟とは全然別個の世界だとも思っているとする大間違いではないか。難しいところですね、宗教の怖い所です。けれど、師と弟子の究極の関係もそういう怖い所にいきつくのではないか、師のあり方を完全否定することによって、当の師匠を死に追い込むことだってあるのですから。

たとえば道元禅師の場合を考えてみましょう。道元さんは比叡山での修行にサジを投げて、早々に山を降りていきます。それで京都の建仁寺に入り、そこで明全というお師匠さんに出会うわけです。そのお師匠さんに誘われて中国まで行くのですが、中国に行った途端に道元はこの明全を捨て去るのですね。ほとんど相手にしない。何故ならば中国に如浄というすごいお坊さんがいたからです。そのまま天童山の如浄の方に行ってしまう。日本でついた師匠、明全を弊履のごとく捨てて、顧みなかった。それというのも、天童山についたあと、道元は一人で旅に出てしまふからです。中国を遍歴して回っているんですね。しばらくして帰って来た時、天童山では日本から一緒に来た明全さんが病気で臥していた。道元は病気で養生している明全和尚を十分に看護する暇もなく、明全さんはそのままそこで死んでしまふ。道元はその師匠の骨を持って日本へ帰ってくるのです。以後、道元は一言も明全のことを言わない。中国の師匠、如浄のことばかりを語ってその人生を送るわけです。道元は師匠を殺したんですね。明全

という師匠を殺したんだと私は思っています。『臨濟録』に出てくる「仏に逢うては仏を殺し、師に逢うては師を殺す」―それを実践したのが道元だと思う。同じことを棟方志功が言っている。真のアーティストとはそういうもののだと。

#### 四 内村鑑三と親鸞

さきに、師匠なんかいるものか、という生き方をした人間の代表として棟方志功の例を挙げたのですが、それは逆に弟子などというものがいるものか、という態度をつらぬいた師匠も結構いたんですね。弟子なんてものは煩わしい、弟子なんてものは持つものではない、そういうことを激しい言葉で言った人の一人が内村鑑三であります。明治の日本を代表する思想家、クリスチャン、そして非戦論者であります。下級武士の家に生まれ、明治の初期に北海道につくられた札幌農学校の学生となった。そこでクラーク博士に学びキリスト教徒になるわけです。私は日本の近代130年の歴史の中でもっとも優れた宗教者一人を選べと言われたら、この内村鑑三を選びますね。仏教界には明治以降、この内村鑑三に匹敵するほどの人材はいなかったのではないのでしょうか。彼は若くしてアメリカに行つて精神病院で看護士の生活をしている。やがて肉体の看取りをするよりは精神の看取りの仕事につくべきだと考えを改めて、アマースト大学へ入つて神学の研究をしています。それで日本に帰つて来て、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』という入信の記録を英文で書いた人です。今から思うと、やはり明治の時代というのはすごい。この内村鑑三の『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、それから同時代の彼の親友だった新渡戸稲造の『武士道』、そして岡倉天心の『茶の本』、―この3人の仕事によって明治近代の日本が世界に知られるように

なつていったのです、かれらの英文を通して。内村鑑三、新渡戸稲造、岡倉天心という3人の人間の問題を考えていくと、おもしろい明治精神史が出来上がるでしょう。その内村鑑三ですが、かれが日本へ帰ってきて、日本の新しいキリスト教は武士道の上に打ち立てられなければならないということを主張しました。そこから無教会の立場に立つ、新しいキリスト教運動が展開するわけです。そしてこの内村鑑三の門に多くの天下の秀才たちが集まってくる。例えは小山内薫、有島武郎、正宗白鳥、志賀直哉等々の文人たちも先を争うように内村の門に入ります。当時、旧制一高の校長をやっていたのが新渡戸稲造で、自分の所へやってくる優秀な学生たちをどんどん内村の所に紹介しております。その後の日本の近代をつくり上げていく政官財のリーダーたちの多くがこの新渡戸稲造、内村鑑三の門をくぐって社会へ出ていっているわけです。ところが面白いことというか、皮肉なことというか、そういう秀才たちの多くはやがて内村の門を出ていった。内村鑑三を裏切つて、キリスト教以外の世界に抜け出して行ったのです。小山内薫が裏切つて、内村の門を出ていく。有島武郎もそうであります。正宗白鳥も出た。そして志賀直哉もやがて内村の門を出ていくわけです。一人去り、二人去りしていく。それは何も文人作家たちだけではなかった。内村鑑三という人物は実に個性的な人間でありまして、弟子に対してイエス・キリストの教えを伝えるその教え方が峻烈を極めていた。多くの当時の青年たちは、その激しさに耐えることが出来なかつた。それで出て行ったということがあるでしょう。そうして遂に内村鑑三は昭和2年のときですが、こういう文章を書いております。「弟子を持つ不幸」です。弟子を持つことは人生最大の不幸である、ということ論じた文章であります。これを書いて3年後の昭和5年に内村鑑三はこの世を去ります。その「弟子を持つ不幸」の中でこういうことを彼は言っている。「自分のところに多くの青年たちがやってくる。理想に燃えた青年たちが次から次へとやってくる。しかし、その青年たちの殆どは自分の欲望を遂げるために私の所へやって来るに過ぎな

い。自分の理想をエゴイステックに追求するためにこの内村を利用しようとしてやって来ているに過ぎない。従って彼らはやがて自分のもとを去っていく。100人中99人がそうだ。1000人中999人がそうだ。願う。若き者よ、文士たちよ、余の元に来ることなかれ。これ以上の不幸はないからだ。」と書いてその文章を結んでいます。「俺には一人も弟子などいらんよ、本当の師というのはイエス・キリスト一人だ。イエス・キリストのもとでは自分も弟子たちも同等の人間である。ブラザー（兄弟）だ。」私はこの文章を読んだとき、親鸞の言葉を思い出しました。13世紀の親鸞、その『歎異抄』という作品の中に出てきます。勿論、これは親鸞自身が書いたものではない。弟子の唯円が、師匠が常日頃言っている言葉を書き留めた文章です。その『歎異抄』の中に「親鸞におきては弟子一人もたずさふらふ」という言葉が出てくる。この言葉が私の心の中で内村鑑三の言っている「弟子を持つ不幸」という言葉と響き合ったのです。ほとんど同じことじゃないか。内村鑑三は親鸞の書物を読んで読み抜いていたのかもしれない、こう思いました。ところが、内村鑑三全集（30数巻という膨大な全集が岩波書店から出ております）の中で、彼が親鸞の『歎異抄』を読んだという記述はほとんど出てこない。自分は『歎異抄』を読んで感動したという言葉も出てこない。それは一体どうしたことか。私は内村鑑三こそが、明治以降、親鸞の『歎異抄』を最も深く読み抜いた人間ではないかと実は思っているんです。そうでなければ「弟子を持つ不幸」なんて、こういう激しい文章がつけられる筈がない、今でもそう思っているからであります。ただ、証拠が無い。13世紀から19世紀までの間、その700年の時空を飛び越えて2人の宗教家が全く同じことを同じような文脈の中で言っているということの不思議さ、これに胸打たれたのです、私は。明治以降多くの日本人が『歎異抄』を読んできた。多くの仏教徒が「親鸞におきては弟子一人もたずさふらふ」という言葉について繰り返し繰り返し議論してきた。けれども内村鑑三のように激しく深くそれを読み解こうとした人間がどれほどいたのか。自分自身のことを考えて、

深く反省せざるを得なかつたのであります。

実は、この内村鑑三の門に入り、そしてその門を去っていった志賀直哉が、後になってかつての師匠だった内村鑑三を思い起してひとつの印象的な文章を書いているのです。それが「内村鑑三先生の憶ひ出」という文章です。内村鑑三は「弟子を持つ不幸」というのを昭和2年に書いて昭和5年にこの世を去っている。更にそれから11年経って志賀直哉が、昭和16年という段階になって初めて「内村鑑三先生の憶ひ出」という文章を書いている。昭和16年というのは第二次世界大戦が勃発した年であります。10年間ずっと志賀直哉は沈黙を守っていた。自分は内村鑑三という師匠を裏切った弟子だからという自覚があったからでしょう。しかし本当のことをいえば、自分にとっての人生唯一の師匠と言える者を挙げるとすれば、それは内村先生をおいて他にない、とどのように告白しているのがこの文章なのです。そこにこういうことを書いています。「自分は18歳の時に初めて内村先生の門に入った。それ以来7年間ずっと毎週のように通いつめた。内村先生のお話を伺い、その文章を読ませていただいて、そのおかげで自分の青春時代は墮落をしないですんだ。社会主義の道に進むこともなく今日の自分の人生を保つことが出来たのだ」と、こう書いております。そして「自分の人生にとって大事な人が3人いる。友人としては武者小路実篤、肉親の中ではお祖父さんの志賀直道だ。そして師匠としての内村鑑三先生である」と、この3人が重要な人物だったということをおっしゃいます。しかし、7年間内村の門に入って勉強したけれども、遂に自分は自分ひとりの道を行んでいこうと思うようになった。そのことを師の内村の所へ行つて告白しているんですね。「私は先生のおかげをもってここまで歩んできましたけれども、これ以後は自分自身の道を行きたくて歩いていきたいと思いますから、去らせていただきます。」すると内村鑑三が快くそれを了解してくれた。「君の道を行きたまえ。しかし再びまた自分の所に来たいと思うようなことがあったらいつでも来たまえ。」と言ってくれた。それで別れて

きた。けれどもその時、不快な思いはひとつもしなかった、と書いているのです。内村鑑三が亡くなってから10年経っていますから、時の流れが彼の心を浄化したということが言えるかもしれません。志賀直哉は内村の門を離れたあと、東京を去って奈良に行くのです。奈良で自分の設計による家を建てた。高畑というところですが、そこであの名作『暗夜行路』を書く。私は2年間奈良市に住んでいたことがあるのです。散歩をするのが好きですから、散歩のコースの一つのスポットがこの志賀別邸でした。私の家から歩いて30分くらいの所でした。広い、なかなか洒落た家です。そこから更に奥の方に歩いていくと新薬師寺に行く。奈良というのは少し歩くと歴史を1000年1500年すぐに遡ることが出来るような、かつての都です。そこで志賀直哉は『暗夜行路』という作品に取り組むわけです。やがて東京に戻っていきます。そのころ、かつての師の内村鑑三が病気になっていて、もうあと幾許もないということを知り友人から聞かされた。それで訪ねて行くのです。10年振りくらいに訪ねていく。その時のことをこう書いています。「丁度お休みになっていて会うことは出来なかった。だが内村先生の奥様に自分が来たことをお伝えしてそのまま辞去した。ところがその後で目覚めた内村先生は『今、志賀さんがやって来ましたよ』と奥さんから聞いて、『ああ、志賀が来たか』——そういう言葉を最後に言い残して、間もなく息を引き取った。」そのことがやがて志賀直哉の耳に入り、「自分が去っていった師匠の、その最後の言葉を間接的に聞かされて、胸が熱くなった」という文章を書いて、この「内村鑑三先生の憶ひ出」は終わっているのです。内村鑑三という人は「弟子を持つ不幸」という文章を書いた。師と弟子の間の難しい関係というものに苦しみ抜き、悩み抜いた拳げ句にその文章を書いたのだけれども、実際は自分の門を去って行った志賀直哉に対して深い愛情といたたらいいのか、こたわりといたらいいのか、気にかかる存在としてずっと念頭に留めていたということがよくわかるんですね。私はこのときの内村鑑三と志賀直哉の関係というのは一体何だったのかと考えることがあります。



実はこれと同じようなことが親鸞とその弟子たちとの間にも起こっていたと思うのです。ご承知のように親鸞は「親鸞におきては弟子一人ももたずさふらふ」といったのですが、彼はなぜそのようなことを言うようになったのか、これは人によって解釈はまちまちだろうと思います。親鸞さんは9歳の時に両親に死に別れて出家をして比叡山に登るわけです。比叡山の山の上で20年間修行した。9歳から29歳まで20年間をあつ湿度の高い、冬は寒い、そして夏は暑い比叡山の山の上で、下級の僧として修行と学問に明け暮れていた。時々山を下りて遊びに出たこともあったでしょうけれども、この修行期間というのは長いですね。20年、青春の時期です。だから親鸞聖人は90歳の寿命に恵まれたのではないかと私は思っている。道元さんは、やはり比叡山の山の上に登って修行なすつておられますけれども、わずか2年足らずで山を下りています。この山にロクな坊主はおらんわいと、さつさと山を下りています。天才ですからね。親鸞さんもそのくらいのはわかっていたと思います。1年でわかったでしょうが、わかって20年我慢したというのが親鸞の親鸞たる所以ですよ。道元さんは我慢が出来なかった。天才というのはそういうものであります。山をぱーっと下りてしまった。だから道元さんは54年の人生しか恵まれなかったのではないか。これは半分冗談、半分本気で言っているんですよ。今の若者たちにはよく言うんです。10年比叡山に行け、そうすると長生き出来るよと。こんなことをいっても、今の学生たちにはあまり説得力がありません。2年間修行した道元さんは54歳、10年間修行した日蓮は63歳、20年修行した親鸞は90歳。親鸞は20年いて、あ結局この山は駄目だ、と山を下りて法然の門に入る。ところがやっとなとすごい師匠に出会ったと思って間もなく、こんどは念仏の弾圧にあう。法然も流され、自分も流される。安樂、住蓮は四条河原で切られる。後鳥羽上皇を中心とする王権によって念仏が弾圧されて、親鸞は越後に流される。今の直江津という所であります。直江津で下り

て車で40〜50分海岸線を西の方へ行きますと「親鸞聖人ご上陸地点」という碑が建っております。その北陸の豪雪地帯でいたい4〜5年過ごしています。ようやく罪を許されて京都に帰ろうかなと思つた時、既に師の法然が亡くなつたというニュースが入ってきて、そんな所へ帰つても仕方がないというので彼は関東に行くわけです。常陸の稲田の田舎に庵をつくつて伝導活動の拠点にするのです。だいたいこれが50〜60代にかけての時代であります。だんだん関東で弟子たちができます。関東教団という、親鸞の原始教団と言つてもいいかもしれません。二十四輩がすぐの弟子、その下に孫弟子が出来ますから、だいたい100人くらいの忠実な弟子がいたんだろうと思いますね。そういう弟子たちとの間での『歎異抄』に現れてくるような言葉が交わされていたかもしれない。『教行信証』という書物も書かれる。ところがどうしたわけか60歳を過ぎてパッと単身で京都に帰つてしまいます。関東の弟子を捨ててたつた一人で帰つてくるのです。何故弟子たちを捨てたのか。関東で念仏教団の拠点をつくつて優秀な弟子たちが出来上がっていたにもかかわらず、何故彼らを捨てたのか。これがよくわからない。それについての文献も残されておりません。阿弥陀如来の救済の前では師も弟子も同じだということを言おうとしたのかもしれない。そうなる内村鑑三と同じですね。自分自身と弟子たちにとって師匠というのはイエス・キリスト一人だ、あるいは神だけだ。師匠は少なくともイエス・キリストだという考え方。親鸞にしてみると師匠は法然さんだけだということになるかもしれない。あとは全部ブラザーだということです。あるいは、いくら自分の考えを弟子に教えようとしても、忠実に理解してくれる人間が一人もいなかったと、みんなそれぞれの欲望を実現するために自分のそばに近寄ってくるだけだ、それで絶望したということだったかもしれない。それで弟子たちを捨てて京都へ帰つた。そういう気分も内村鑑三と非常によく似ている。ところが、面白いというのか、運命は不思議だと言ふべきか、その弟子たちがしょっちゅう親鸞のもとに手紙を送っている。問題が起こる度に親鸞に手紙を出している。お師匠

さん、食べるものが無いでしようと言ってお米を送ってくる、銭を送ってくる。たまには、はるばる東海道を歩いて親鸞のもとにやって来て教えを乞うて、そして帰っていく。弟子はいらんぞと言って京都に帰って来た親鸞のもとに弟子たちはやはり、ぽつりぽつりと連絡をつけたり通信をしたり実際そこまでやって来ている。関係は完全に切れてはいないわけです。この点も内村鑑三とよく似ている。ますます親鸞と内村鑑三の人間としての同質性、師と弟子という関係を真剣に生き抜いた人間の生き方の同質性というものを私は感ずるようになったのです。その辺に師と弟子というものの在り方を根源的に規定する何ものかがあるのかもしれないと思っっているのであります。

##### 五 齊藤宗次郎のこと

そこで、最後にもう一人の弟子について紹介したいと思ひます。内村鑑三の弟子のことです。内村鑑三の門に入った知識人の数は非常に多いのでありますが、しかし知識人というのはだいたい裏切るので。知識人ほど信用のならない存在はないのです。大学の教師ほど人間として信用の出来ない存在もない。私自身を含めて嫌というほどそれを体験している。その次は坊さんですかね。坊さんと教師というのは一番信用のならない存在であります。そういう信用ならざる存在が師と弟子ということを私みたいにこだわって議論をする。私は、自分のことを言ってるのです。

ところが、内村鑑三にあまたいた弟子の中で最後の最後まで内村鑑三という師匠を師として尊び、その師のために奉仕の精神を捧げ尽くした人間がただ一人いたのです。ただ一人ではなかったかもしれないけれども、そういう珍しいすごい人間が一人いた。その人を是非紹介したいと思ひます。その人の名前が齊藤宗次郎であります。ご存

知らないと思います。戦前、岩波書店から第一回目の内村鑑三全集が出版された時の編集委員の中に、戦後の初代の東大総長、南原繁さんであるとか二代目の矢内原忠雄さんというような人達の名前が載っております。塚本虎二という名もある。この人は内村鑑三の最も正統的な弟子と言われた方です。そういう錚々たる人物が10人くらいずつと出てきまして、その一番最後あたりに斎藤宗次郎の名前が出て参ります。しかし実際に全集の編纂の細々した仕事をきちんとやり抜いたのは斎藤宗次郎です。その他の弟子たちは自分の仕事や研究者としての仕事などがあつて出たり入ったりしていましたが、終始そばにいて師の最後を看取りまでやったのが斎藤宗次郎という人です。この人の最晩年、内村鑑三がこの世を去るその時に、毎日のようにその師匠の脈を取った。昨日は何拍、今日は何拍と、記録がずーつと残されております。いろんな所で講演をしたり発表している師匠の文章を断簡零墨に至るまでそれを克明に集めて編集し、印刷に付す準備をした最も重要な人物です。その斎藤宗次郎が実は岩手県花巻市の出身なんです。今日はお国自慢をするためにやって来たわけではないのですけれども、岩手県花巻市郊外、曹洞宗のお寺の住職の息子として生れた。轟という姓のお寺でありまして、現在もその子孫の方が継いでおります。しかし若い頃、斎藤家に養子にやられ、そして内村鑑三に影響を受けてクリスチャンになるのです。皆さん、宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」という詩をご存知でしょう。「雨ニモ負ケズ 風ニモ負ケズ・・・東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ 南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラ ナクテモイ、トイヒ 北ニケンクワヤソシヨウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ・・・ミンナニデクノポ ートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ サウイフモノニ ワタシハナリタイ」。有名な宮沢賢治の詩です。この「デクノポー」のモデルではないかと言われるようになったのがこの斎藤宗次郎です。戦前そういうことは全然知られていなかったのです。何故それが知られるようになったか、ここ20年くらいの歴史の中で明らかにされた

事実があるのです。斎藤宗次郎は岩手師範に入ってそこを卒業して、花巻に帰って小学校の先生をします。その小学校を私も出ていますから、私の先輩になります。やがて、斎藤宗次郎が先生になった後、宮沢賢治が花巻小学校を卒業し、盛岡中学校に行っている。賢治や斎藤宗次郎と私との関係というのは、その小学校を同じくしたというところだけは似ている。岩手師範を出て、花巻の小学校の先生になったその前後の頃、斎藤宗次郎は花巻の地で内村鑑三の文章を読むのです。

内村鑑三は、アメリカから帰ってきて『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』で世界的名声を既に得ていた。日本を代表するクリスチャン。当時は「万朝報」と言う大新聞の論説を担当していたのはご存知だと思います。この時の論説の仲間が幸徳秋水とか堺利彦であります。ラジカルな社会主義者たちです。その仲間の一翼にいて、日露戦争反対の論陣を張っていた。内村鑑三の非戦論が最も加熱した時代、それが明治30年代であります。日清戦争の時は、正義の戦いだと言って支持している。この辺も明治のナショナリズムということを考えないとよくわからない。しかし日露戦争のときだけは違って、正義の戦争ではないということでは非戦論を展開している。「自分の非戦論が国家の政策として認められない以上、自分は納税をしない、徴兵にも応じない。世の青年たちよ、納税拒否と徴兵拒否によってこの日露戦争に反対せよ」、そういう論陣を張っていたのです。そういう点ではすごいです。内村鑑三というのは。あの時代にそれだけの迫力のある仕事をした仏教徒がいたか、いないと思えますね。斎藤宗次郎はその文章を読むわけです、岩手の片田舎で。そうして内村鑑三に、手紙を書いて、先生の門に入りたいと申し出た。盛岡に内村鑑三が講演にやって来た時、盛岡の駅前の旅館で二人は初めて出会った。この出会いの感動の場面についても斎藤宗次郎は書いております。こうして、彼の花巻に於ける教師とキリスト教徒としての活動が始まるのです。ところが、その小学校の教室で、小学生たちを相手に内村鑑三の非戦論を堂々と説いたのです。

この日露戦争はいかに正義にあらざる戦争かということ説き始めた。これが当時の岩手の教育会で大問題になるわけです。そしてついに上層部から色々な圧力がかかるようになった。それを東京にいた内村鑑三が聞いて急遽花巻にやって来る、自分の弟子を諫めるために。明治36年12月、暮れも押しつまった時でした。その翌年、日露戦争が勃発する。深夜に花巻に着きました。当時の花巻は、冬は雪が1m〜2mくらい積もる所であります。斎藤宗次郎によると、雪ゾリを持って駅に迎えに行き、内村先生を乗せて自分の家までお連れしたという。その晩、徹夜をして内村鑑三は斎藤宗次郎に、その過激な行動を止めるように懇々と諭した。イエス・キリストの御心は汝が今やっているようなことを許さなはずである。汝が小学生に反戦論を説くことによつて、その周辺の人間がどれだけ迷惑を被るか、それを考えるべきであると。翌朝になって漸く斎藤宗次郎は師の言葉を受け入れるのです。そして花巻のキリスト信徒たち数10人を集めて集会が開かれ、終わつて北上川に行った。雪の北上川です、素晴らしかったですと思います。それを見て内村鑑三は感動しているんです。間もなく内村は東京に帰ります。帰つてから彼はそのときのことを回顧しながら、北上川のほとりでみたあの光景を美しい詩にして斎藤宗次郎に贈った。その詩がいいんです。内村鑑三全集の明治36年12月の項に出て参ります。ご関心のある方は全集を見ると、素晴らしい詩に出会うことが出来ると思います。以後このときは「花巻非戦論事件」として、少なくともキリスト教徒の間ではよく知られるようになるわけです。

斎藤宗次郎は師匠の説得を受け入れて、そういう自分の過激な行動を止めるのですけれども、時すでに遅かった。県の教育会に問題にされて、遂に教師をクビになってしまう。クビになった後、何をやったか。内村鑑三のアドバイスを受け入れて新聞取次店を始めたんですね。その新聞取次店が私の実家のお寺のすぐそばなんです。それから毎日のように新聞の配達の仕事をするのですが、その配達の仕事が変わっていました。ある一軒の家に新聞を入

れると、そこから出て来て10 m歩いて天を仰いで神にお祈りを捧げる。そしてまた次の家に新聞を入れに行き、そのあと川のほとりに行って神にお祈りを捧げる。これを繰り返しながら新聞を配達していくわけです。一日40 km歩いたというんですね。比叡山の千日回峯行では行者さんが平均して一日に40 kmの中を歩くというのですから、凄いものです。これが東京の新聞界に評判となりました。内村鑑三の口を通して広く知られるようになる。当時、内村鑑三の親友の一人に中村不折という画家がいました。あの時代の代表的な絵描きさんです。この中村不折が「岩手に日本のトルストイがいる」と言ったというんですね。すごいものです。斎藤宗次郎は、トルストイと比較された。そしてその新聞配達をする時は、右のポケットにお菓子を沢山入れ、左のポケットに小銭を入れて、子供たちに会うと必ずそのお菓子をやった。病気で臥せている人がいると、枕もとにいつて慰めの声を掛けて、そして何がしかのお金を置いていった。そのため毎日のように外に出る時は両方のポケットは膨らんでいた。最初花巻の子供たちは、斎藤宗次郎は禿げ頭なので、禿げ頭のヤソと言ってバカにしていた。やがて1ヵ月経ち、2ヵ月経つうちに、お菓子買うなら花巻おこし、新聞取るなら斎藤先生と、こう言うようになった。これだけの大逆転が起こった。斎藤宗次郎の名前がだんだんに知られていくようになったということです。ところがその配達をしている途中、花巻農学校に立ち寄るようになります。花巻農学校も斎藤新聞取次店の新聞を取っていたのでしよう。そしてその当時、花巻農学校の教師をしていたのが宮沢賢治です。宮沢賢治が盛岡高等農林を卒業して花巻にやって来るのが大正10年であります。斎藤宗次郎の方は、その後5年間いて、大正15年になって東京に去っていきます。内村鑑三のもとでキリスト教の伝道に専心するために花巻を去るのであります。その大正10年〜15年までの間は、斎藤宗次郎と宮沢賢治の間で非常に親密な関係が出来上がっていく時期でした。賢治は自分の農学校で生徒たちに自分がつくった芝居、「ポランの広場」であるとか「饑餓陣営」であるとかを上演していた。そういう時に必ず斎藤

宗次郎を招待していた。ベートーベンやモーツァルトのレコードコンサートをやる時も主賓として斎藤宗次郎を招いていた。だんだん賢治はその斎藤宗次郎の日常の生活をみているうちに、かれの考え方や生き方というものに感動し、尊敬の念を寄せるようになった。それで二人の交流が深まっていった。このような事実は戦後も昭和30年代までは誰も知らなかった。それが知られるようになったのは、斎藤宗次郎が明治の頃から戦後昭和34年に93歳で亡くなるまで詳細な日記を付けていたからです。この日記の全体の量が膨大なものです。私はその原本を見ておりますけれども大変な量にのぼるんじゃないでしょうか。亡くなった後その日記が発見された。それを調べているうちに、大正10年〜15年の日記に斎藤宗次郎と宮沢賢治との間に非常に密接な友人の関係が取り結ばれていたということがわかったのです。私はその部分も見ました。何月何日、何時何分、花巻農学校に行つて畑山校長、及び宮沢賢治さん等と一緒に話をする、レコードコンサートを聴く、宮沢賢治作のお芝居の上演を見る、などと書かれている。それに対する厳しい批評も書いております。そういうことがわかるようになった。それから、斎藤は東北における苺の栽培を最初にやった人でもあります。そういうこともだんだんわかってきた。苺の栽培、トマトの栽培は名人の腕を持っていたといえます。毎年のように東京の内村鑑三や中村不折のところに苺を送っている。花巻中でも斎藤先生の苺は知らない者はいないくらいになっていました。園芸についても大変な知識を持っている。我々は今まで宮沢賢治の作品に出てくる園芸の世界は賢治の独創だと勝手に思っていたわけですが、ひよっとするとこれは斎藤宗次郎の影響だったのかもしれない。そういうところから、「雨ニモ負ケズ」というあの詩の「デクノボー」のモデルがひよっとすると斎藤宗次郎かもしれないということになってきた。これからはこの問題をもっともっと深く研究していく必要があると私は思っております、かれの日記の原本の刊行という仕事を何とか実現させようと思つて居るのです。これがもし実現いたしますと、少なくとも大正5年から15年ごろに至るまでの間、東



北と関東を結んで内村鑑三と斎藤宗次郎と宮沢賢治の三者の関係というものが明らかになってくると思います。これからの内村鑑三研究、宮沢賢治研究、斎藤宗次郎研究に非常に大きなインパクトを与える、そういう資料になるのではないかと思っっているわけでありませう。斎藤宗次郎は前から、新聞取次店の仕事を切り上げて早く東京へ行って内村鑑三の仕事を手伝わなければならぬと思ひ続けておりました。それで大正15年に一家を挙げて東京へ移つていくのです。角筈の内村鑑三の家の近くに居を構えて、師の看取の最後まで面倒を見ろということになります。内村鑑三はこうしてその最晩年、死を目前にして斎藤宗次郎という類稀な弟子を持つことが出来たんですね。内村は昭和5年に世を去りますが、その3年前に書いた「弟子を持つ不幸」という文章を裏切るような、そういう忠実な弟子に看取られて、最後に息を引き取ることが出来た。死につくことが出来た。

## 結 び

師と弟子の問題には色々複雑な人間関係が絡まりあうものですけれども、それが本当の師と弟子の関係であるならば、最後に師の心に光を灯すような弟子が現れる。それが内村鑑三と斎藤宗次郎の関係だったのではないでせうか。そして同時に、そこに弟子の生涯を決定する、あるいは方向づけるような師の最後の在り方というものがみえてくるのではないでせうか。そういう奇跡のような師と弟子の出会いを信ずることなしには、これからの日本の教育を本気で考えていくことは出来ないのではないか、私はそう思っているのです。戦後日本の教育はこの50年間にいったい何をしてきたか。我々は親も子供も、教師も生徒も学生も、人間関係、人間関係と、これしか言つてこなかったと思うんですね。親と子との関係も人間関係、友人との関係も人間関係、会社の上司と部下の関係も

人間関係、学校でも教師と学生の間が人間関係……。皆横並びの水平関係でとらえてきた。横並びの人間関係の世  
界では、人間の関係は本当は安定しない。やはり師と弟子という垂直の関係をそこに持ち込まなければ駄目なので  
はないか。これまでの日本の戦後教育は大きな曲がり角に来ている、と思わないわけにはいかないのであります。  
人間関係という水平軸に師弟の関係という垂直の縦軸を導入しなければならない、そういう時に今来ているのでは  
ないかということです。そういうことを考える時に、内村鑑三という師匠の在り方は、なかなかユニークで、豊か  
な精神の宝を我々に残しているのではないか。そしてそのような関係をさらに遡って求めていけば、例えば親鸞に  
まで行き着く、あるいは道元に行き着く。今日は道元さんの話はしませんでしたけれども、永平寺における道元の  
弟子を鍛える教育の仕方というのは峻烈を極めたものでした。やはりこれからの人間教育には師弟という垂直の軸  
を導入しなければいけないのではないか、そういうことをくり返し申し上げて私の話を終わらせていただきます。